

1. はじめに

臓器移植は善意の意思によって提供される臓器があつてはじめて成り立つ医療である。とくに死後善意の意思によって提供される臓器が移植される場合は、本人の崇高な提供意思、最愛の肉親の死という深い悲しみを乗り越えて提供に同意する家族の善意と決断が前提であり、これなくして移植医療は成り立たないことはいふまでもない。

また多くの患者が臓器不全と闘いつつ一日千秋の想いで臓器移植を待っており、これらの患者にとって臓器移植は未来に生命を繋ぐ唯一の機会である。このことは移植者と移植待機者の生存率を比較するまでもなく自明の理であろう。また臓器提供者およびその家族の崇高な善意の意思の実現は、救急医、脳神経外科医、内科医、小児科医、麻酔医、看護師、検査技師、社会福祉士、移植コーディネーター、消防、警察などの多くの関係者の善意の、そして使命感に満ちた尽力の上で可能となることである。

したがって提供される臓器は単なる臓器ではなく、提供者およびその家族の人類愛、限らない善意がこめられた『生命の贈り物 (Gift of Life)』であり、事実それによってのみ多くの患者の救命が可能となる。

移植医はこの多くの人々の善意によってはじめて可能となった臓器の摘出手術において、提供者に対する礼意を保持しなければならない。また提供施設のスタッフに対して常に感謝の意をもって接し、礼儀正しく振る舞うことが要求される。また臓器の摘出術に際しては、プロフェッショナルとして細心の注意と最善の技術をもつてのぞむ必要がある。摘出手術における不注意あるいは技術的瑕疵により臓器が移植できなくなることは、けつしてあつてはならないことである。それは提供者の崇高な善意の意思と最大の悲嘆を乗り越えてなされた家族の決断を無にすることであり、同時にその臓器によって救われるはず患者の救命の機会を絶つことになりかねないからである。同時に提供者の善意の意思の実現に向けての多くの人々の尽力を無にすることにもなりかねない。

このたび日本移植学会は関連研究会・学会の協力のもとに、「臓器採取術マニュアル」を作成した。これは各臓器の採取術式を標準化し、適確な手術操作により貴重な提供臓器を最大限に有効に活用することに資するためである。本マニュアルは手術手技のみでなく、各操作において起こりうる事態、さらには万一そのような事態が生じた際の対処法についても解説した。そのほかにも臓器採取術に至る流れ、術前ミーティング、必要器材、さらには手術に際しての心構えなどについても触れた。

各臓器の採取術については、それぞれの分野におけるエキスパートが担当した。臓器摘出を担当する医師のみでなく、移植手術を担当する医師、移植コーディネーターも含めて広く読んでいただきたい。とくに臓器採取術に際しては事前に必ず本マニュアルに眼を通して確認していただきたい。本マニュアルが最善の移植医療の実現に少しでも貢献することができれば望外の喜びとするところである。

最後に、本マニュアルの作成に尽力された委員の諸先生に深い謝意を表すると同時に、臓器採取術における原則を再確認して筆を擱く。

1. 礼意と謝意を保持して摘出手術にのぞむこと
2. 提供施設においては謝意と礼節をもって振る舞うこと
3. 不断に自らの技術を磨き、最善の技術をもって手術にのぞむこと
4. 起こりうる事態を常に予測し、それを回避するために全力を尽くすこと
5. 万一不慮の事態が起きた場合は適確に対処し、その情報を関係者と共有すること

2011年6月27日

日本移植学会理事長

寺岡 慧